

『理不尽の中に立つ姿』ヨハネ18:12-14,19-24

18:12 それから一隊の兵卒やその千卒長やユダヤ人の下役どもが、イエスを捕え、縛りあげて、

18:13 まずアンナスのところに引き連れて行った。彼はその年の大祭司カヤパのしゅうとであった。

18:14 カヤパは前に、ひとりの人が民のために死ぬのはよいことだと、ユダヤ人に助言した者であった。

...

18:19 大祭司はイエスに、弟子たちのことやイエスの教のことを尋ねた。

18:20 イエスは答えられた、「わたしはこの世に対して公然と語ってきた。すべてのユダヤ人が集まる会堂や宮で、いつも教えていた。何事も隠れて語ったことはない。

18:21 なぜ、わたしに尋ねるのか。わたしが彼らに語ったことは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。わたしの言ったことは、彼らが知っているのだから」。

18:22 イエスがこう言われると、そこに立っていた下役のひとりが、「大祭司にむかって、そのような答をするのか」と言って、平手でイエスを打った。

18:23 イエスは答えられた、「もしわたしが何か悪いことを言ったのなら、その悪い理由を言いなさい。しかし、正しいことを言ったのなら、なぜわたしを打つのか」。

18:24 それからアンナスは、イエスを縛ったまま大祭司カヤパのところへ送った。

●序論

さて、先週からしばらくの時、イエス・キリストの受難の記事を読み進めています。説教者として、このところを繰り返して読んでいる中で感じているのは、胸を締め付けられるような 嫌な感じです。

リビングバイブルで12節…

:12LB)…ユダヤ人の役人たちは、大隊長や兵士たちといっしょにイエスに襲いかかり、縛り上げました。

なにひとつ罪を犯さない方を、武装した兵卒たちが一斉に襲い掛かってとらえて縛り上げた。そんな必要ないはずなのに…。その場面を想像するだけで苦しくなるのです。

「理不尽」「不条理」という言葉を使います。どちらも、理屈に合わない、道理が通らない、どこか間違っている…というありさまを示します。

イエスさまは、不条理の中で理不尽な扱いを受けている…ということでしょう。

私たちは皆、それぞれに人生において何らかの不条理に直面した経験があるのではないのでしょうか。そこには、理不尽な状況、不公平な扱い、説明のつかない苦しさの経験かもしれません。私たちは「なぜこんなことが起こるのか」「なぜ私がこんな目に遭わなければならないのか」と、疑問や怒り、あるいは深い絶望を抱くことがあります。

ある人にとっては、だれかの罾やだましごと。また事故やわざわざいなど。

しかし、そのような不条理もまた、神さまの知らないことではありません。そこで、私たちに語りかけるメッセージがあることにも気づくことができれば…と願います。

イエスさまのその受難にそれがありました。賛美「傷跡」の歌詞を思い起こすのです。
 イエスさまが背負っていく カルバリの丘 目指して
 イエスさまの肩にかかる 十字架はわたしの罪の重み
 裏切られ 罵られても 泥沼から救うために
 あなたの十字架 その手の傷跡は わたしのための愛のしるし…

イエスの苦しみ、そのすべてが、わたしたちを愛する愛のゆえであった。そこに意味が、理由が、目的があったことを知るとき、わたしたちの目は自然に神さまに向けられます。

●本論

I. 理不尽のただ中に置かれる姿

18:13 まずアンナスのところに引き連れて行った。彼はその年の大祭司カヤパのしゅうとであった。

アンナスという人物は、当時のユダヤ社会で非常に大きな影響力をもった存在でした。裏で、宗教界を動かす。いわば宗教界のフィクサーのような存在だったのです。すでにユダヤ人の宗教社会そのものが、不条理な闇に覆われていたことがわかります。

そういう闇の中でこのアンナスのような人に逆らってはならないという、出来上がった雰囲気。そこにあるイエスさまに対する拒絶反応。それそのものが、神からの裁きであると、としてイエスさまは、以前に語っていました。

ヨハネ3:19-20 そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。悪を行って
 いる者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、
 光にこようとはしない。

さて、本来ならば、ユダヤの律法に基づく裁判は昼間に、議員たちの出席のもと、公開で行われ、証人を立てて公正に審理されるべきでした。

さらにその尋問は、最初から公正な裁判を目指すものではありませんでした。それは、イエスさまを陥れ、有罪とするための予断と偏見に満ちたものだったのです。

:19 大祭司はイエスに、弟子たちのことやイエスの教のことを尋ねた。

イエスの言葉の中に、彼を罪に定める証拠を見つけ出そうとする巧妙な罠でした。

こういう「罠」があることに気づいたなら、わたしたちはどうするでしょうか？

お気づきのように、このイエスさまの尋問記事の合間合間に、ペテロが周囲から問

われてイエスさまを知らない…と主張する記事が出てきます。

その姿を、他人事と思えない、そういう状況の中にわたしたちが置かれることもあるのです。「おかれる」というからには、自分の意志だけではどうすることもできません。イエスさまもそうでした。そういう状況下の経験がある。だからこそイエスさまに学ぶのです。

Ⅱ. 真実な答えをもって立つ姿

アンナスの問いかけに対して、イエスさまは毅然としてこう答えられました。

:20-21 …「わたしはこの世に対して公然と語ってきた。すべてのユダヤ人が集まる会堂や宮で、いつも教えていた。何事も隠れて語ったことはない。なぜ、わたしに尋ねるのか。わたしが彼らに語ったことは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。わたしの言ったことは、彼らが知っているのだから」。

イエスさまは、すべての人々の前で教えてきたたことを堂々と語られました。密かに陰謀を巡らすのではなく、神の真理をすべての人々に明らかにしてきた…と。

しかし、その答えに対し、そばにいた下役のひとりイエスさまの顔を平手で打ちました。今日でもそうですが、自分の正当性や権威への反逆に対して、言葉や力を用いた暴力をふるうというありさまを見ることがあります。

しかしこのときも、イエスさまは決して怒りをもって反応することなく、毅然として答えられました。

18:23 …「もしわたしが何か悪いことを言ったのなら、その悪い理由を言いなさい。しかし、正しいことを言ったのなら、なぜわたしを打つのか」。

不条理、理不尽のただ中で翻弄される姿はそこにはありません。

イエスさまはそこで、ご自分の真実な答えをもって立たれたのです。

不当な裁きの場で、暴力に屈することもなく、相手を非難するのでもなく、…ヘブル人への手紙12:23にはこうあります。

12:3 あなたがたは、弱り果てて意気そそうしないために、罪人らのこのような反抗を耐え忍んだかた（イエス・キリスト）のことを、思いみるべきである。

初期のクリスチャンたちも、そして歴史の中で多くのクリスチャンたちは、迫害というもっとも不条理な歴史経験の中で、ただ自分たちの力や主義主張にたよったのではなく、★イエスさまに目を向けていたのです。

Ⅲ. 真実なとりなし手として立つ

祭司職について以前にも申し上げました。

祭司は、民の側に立って神に向かってとりなしをする人です。

イエスさまは、ここでひとりご自身が負うべき贖いの十字架を目指して歩を進めておられました。それはご自身のいのちをもって民をとりなし贖う、真実な大祭司の姿で

あったのです。

ヘブル人への手紙の作者は、イエスさまについてこう表現しています。

「このような大祭司こそ、私たちにとって必要な方であり、聖で、罪がなく、汚れがなく、罪人たちから離され、天よりも高くされた方です。」（ヘブル7:26）

イエスさまは、罪人である私たちの身代わりとなり、神の前にとりなしをし、命をささげるために、今この理不尽のただ中に立っておられるのです。

先ほど紹介した賛美にもあったとおりです。

♪裏切られ 罵られても 泥沼から救うために あなたの十字架 その手の傷跡は わたしのための愛のしるし…

あらためて、イエスさまこそ、わたしたちすべての人を思い、ご自身を犠牲にしてまで、とりなしてくださった、真実な大祭司であったとわかるのです。

〇さいごに

最初に、わたしは復活の勝利を知りながらも、このイエスさまが、ただ一人で経験された不条理な裁きを読み進めていくと、胸を締め付けられるような 嫌な感じがする…と話しました。

ヨハネはまさにそのありさまを目撃し、またのちに各所の教会で証しし、この福音書に記した。この情景を思い起こしながら、この不条理を短い物語として書き綴っています。それはその不条理の中にしっかり立たれたお方、そしてそれを超えて勝利を収められたお方を示すためです。

そこにクリスチャンとして、不条理の中におかれたとき、のわたしたちがならうべき姿があります。 その不条理・理不尽の中で、キリストを見上げて「立つ」ことです。それが、信仰の歩みです。自分の力ではなく、神の恵みのみを頼りとして歩むのです。

このイエスさまについて、さほど紹介したヘブルの手紙の作者はこう紹介しています。

ヘブル7:24-25 しかし彼は、永遠にいますかたであるので、変らない祭司の務を持ちつづけておられるのである。

そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである。

17章で、大祭司のとりなしの祈りを取り上げていました。あの祈りはあの時限りで終わっていたわけではありません。 今もイエスさまはわたしたちを思い、とりなしてくださるのです。

そしてその祈りは今、わたしたちの時代、聖霊による具体的助けとなっているのです。